スワヒリ語の前鼻音化阻害音について

古本 真

京都大学大学院／日本学術振興会[1]

0 はじめに[2]

スワヒリ語の代表的文法のひとつである Ashton (1947: 3) には子音目録のなかに鼻音結合 (nasal compound) として mb, mv, nd, nz, nj, ng が挙げられている。この鼻音結合は (1) に挙げる通り語頭や語中を問わず現れる。

(1) *mbona*「なぜ」 *kamba*「ロープ」
ndege「鳥」 *-enda*「行く」
njoo「来い」 *manjano*「黄色」
-ngoja「待つ」 *mlango*「扉」
mvua「雨」 *chumvi*「塩」
nzige「バッタ」 *chenza*「みかん」

Conti-Morava (1997: 844) のようにこの鼻音結合を前鼻音化閉鎖音[3]という一つの音素とする立場もあるが、一般に[4]この鼻音結合が一つの音素として認められているとは言い難い。しかしながら一つの音素として認めない場合、音素表記に曖昧性が生じてしまう。また音節構造を考慮すると一つの音素とみなす方がより簡潔な記述となる。本稿ではまず 1 節で鼻音結合を一つの音素（前鼻音化阻害音）として立てる理由を述べる。そして 2 節で前鼻音化阻害音を音素としてたてる際に問題となりうる 9/10 クラスの名詞[5]の語頭に現れる前鼻音化阻害音について論じる。3 節では語中の前鼻音化阻害音について述べる。

なお前鼻音化阻害音を音素として立てない場合、音素目録は (2) のようになる[6]。

---

[1] 本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費 (DC1) (課題番号: 25・3150) の研究成果の一部である。

[2] 本稿で用いるデータは特に明示しない限り、筆者がザンジバルストーンタウン在住の 20 代男性から得たものである。標準スワヒリ語はザンジバル都市部方言をもとに策定されており、本稿での議論をある地域方言に限定したものではなくいわゆる「スワヒリ語」の議論として大きな問題はないだろう。

[3] Conti-Morava (1997: 844) は鼻音+閉鎖音 (mb, nd, ng) のみを音素として立てている。

[4] Polomé (1967), Myachina (1981), 中島 (2000), Mohammed (2001) 参照。なお Mohammed (2001: 6) は前鼻音化阻害音を音素とするかには議論の余地があると述べている。

[5] スワヒリ語の名詞は [接頭辞-語幹] と分析される。名詞は 1~11, (14), 15~18 のクラスに分類され、名詞接頭辞はそのクラスに応じて異なる。10 クラスまでは隣り合う奇数番号と偶数番号が単複の対をなす。多くの形容詞も形態的には名詞と同じふるまいをみせるが、本稿ではこうした形容詞も名詞として議論を進める。

[6] (1) は Polomé (1967: 38-39) をもとにしている。[] 内は異音を表す。なお標準スワヒリ語の正書法では /ʧ/=ch, /ʃ/=j, /g/=g, /ɸ/=f, /β/=v, /θ/=th, /ð/=dh, /ʃ/=sh, /ɣ/=gh, /ɲ/=ny, /ŋ/=ng'（鼻音結合に現れる際は n）, /j/=y であり、それ以外は音素表記と同じである。本稿で正書法を用いる場合は斜体で表記する。

(2) 子音

p, b[ɓ, b]	t, d[ɗ, d]	ʧ, ʃ [ʃ, ʤ]	k, g[ɠ, g]	
ɸ, β[7]	θ, ð s, z	ʃ	ɣ	h
m	n	ɲ	ŋ	
	l, r			
w		j		

母音

i, e, a, o, u

また音節構造は V, CV, CCV, CCCV, N となる (Polomé 1967: 50)。このように音節を設定すると語の後ろから 2 番目に強勢が置かれるといえる。つまり音節は強勢を担いうる単位である。

1 前鼻音化阻害音を音素として立てる理由

1.1 音韻表記 /mb/ の問題

(2) のように音素を立てた場合、/mboga/ という音素表記が [m̩ɓoɠa]「カボチャ（茎）」と [mboɠa]「野菜」を表すことになってしまう。同様の問題は/mbatata/ ([m̩ɓatata]「ジャガイモの茎」[mbatata]「ジャガイモ」), /mboβu/ ([m̩ɓoβu]「腐った（3 クラス）」[mboβu]「腐った（9/10 クラス）」), /mbaja/ ([m̩ɓaja]「悪い（1, 3 クラス）」[mbaja]「悪い（9/10 クラス）」) にも当てはまる[8]。

/m/ という一つの音素を立てるのであれば、その /m/ が音節を形成するかどうか、また後続する破裂音の条件異音[9][ɓ], [b] がどのような環境で現れるかは音韻論的に説明されるべきであるが、そのような説明はこれまでのところ筆者の知る限りなされていない。上記の問題に限っていえばただ形態論的に成節的な /m/ は 1, 3 クラスの名詞接頭辞に、非成節的な /m/ は 9/10 クラスの名詞接頭辞に帰するということが言及されているだけである。

もし前鼻音化阻害音を音素として認めるとすると上記の /mb/ という音韻表記に関する問題はなくなる。鼻音と入破音と前鼻音化阻害音がそれぞれ別の音素となるからである。本節の最初に挙げた問題を例にとると、/m/と/ɓ/と/mb/ という音素が立てられ、「カボチャ（茎）」は/mɓoga/に、「野菜」は/mboga/になる。

なお Welmers (1973: 69) は「（1, 3 クラスの名詞接頭辞は）/b/, /v/ に前接する場合を除いてその音節性が明瞭に聞こえる」と述べており、/b/ と /v/ に前接する両唇鼻音が音節を形成しているかどうかの聞き分けが難しいことをほのめかしているが、筆者が聞いたところ、鼻

[7] /ɸ/, /β/ の音価は唇歯摩擦音とされるが、筆者が調べたところこの二つの音価は両唇摩擦音であった。

[8] これらの違いについては Polomé (1967), 中島 (2000) でも指摘されている。同様の問題は/mbuni/「コーヒーの木」「ダチョウ」、/mbaazi/「キマメの木」「キマメの実」にも当てはまるとされるが、これらの語を筆者のインフォーマントは知らなかった。

[9] Polomé (1967: 41) は [ɓ] と [b] を条件異音みなし、成節的な m が前接する場合は [ɓ] に、非成節的な m が前接する場合は [b] になるとしている。

音の長さや後続する破裂音の音価にはっきりとした違いがみられた。また筆者のインフォーマントの直観でも /b/ に前接する 1, 3 クラスの名詞接頭辞と 9/10 クラスの名詞接頭辞は違う音として認識しているようである。

1.2　音節構造上の理由

鼻音結合の組み合わせは常に同一調音点の鼻音と有声阻害音である。鼻音に調音点の異なる有声破裂音が後続することも、語末が鼻音になることもない。こうした鼻音と有声破裂音の分布からこの音連続は同じ音節に属していると考えるのは問題ないだろう。

CCV という音節構造のありうる音素配列は鼻音+有声破裂音+母音、もしくは子音+半母音+母音である。鼻音+有声阻害音+母音という連続は音節を認定する際のひとつ大きな基準となる聞こえ度の原則（音節の始まりからピークに向かって聞こえ度が高くなり、ピークから音節の終りに向かって聞こえ度が低くなっていくという原則）に反している。他にこの原則に反している子音連続があるわけでもなく、非常に特異な音節構造である。記述の簡潔性という観点からも前鼻音化阻害音を認める分析の方が好ましいと言える。

1.3　前鼻音化阻害音をたてた場合の音素目録

以上のことを踏まえ前鼻音化阻害音を音素として立てるとすると子音の音素目録は (3) のようになる。以下の音素表記はこの音素目録に基づく。

(3)	ɓ, ɓ, mb		t, ɗ, nd	ʧ, ʃ, ɲdʒ	k, ɠ, ŋg	
	ɸ, β, mβ	θ, ð	s, z, nz	ʃ	ɣ	h
	m		n	ɲ	ŋ	
			l, r			
	w			j		

2　前鼻音化阻害音を音素とする場合の問題点

これまで前鼻音化阻害音が音素として認められなかったのは 9/10 クラスの名詞の語頭の前鼻音化阻害音の鼻音と有声阻害音の間に形態素境界が存在することが大きな理由として考えられる。本節では 9/10 クラスの名詞接頭辞について論じる。

2.1　語頭に現れる前鼻音化阻害音について

語頭に現れる前鼻音化阻害音の鼻音部分は、9/10 クラスの名詞接頭辞として分析される。つまり前鼻音化阻害音の鼻音部分と有声阻害音の間には形態素境界があるというのである。Welmers (1973: 68-69) はこのことによってスワヒリ語において鼻音と有声阻害音を別の音素としてたてる分析が魅力的に映っているのかもしれないと述べているが、それに続けて形態素境界があるかどうか、別個の音素を立てるか一つの音素とみなすべきかどうかは実際は関

係のない問題であるとも指摘している。語頭の前鼻音化阻害音は接頭辞付加ののち鼻音の調音点同化と有声阻害音の非入破音化[10]が起こる形態音韻変化と考えることができるが、その結果生じる鼻音+有声阻害音という音連続は 9/10 クラスの名詞の語頭以外にもスワヒリ語には存在する。もし 9/10 クラスの名詞の語頭以外の鼻音+有声阻害音を 1.2 節で述べたような理由で一つの音素とするのであれば、9/10 クラスの名詞接頭辞の付加の結果生じた鼻音+有声阻害音を一つの音素とみなしても問題はないだろう。

2.2　語頭の前鼻音化阻害音の形態音韻変化

ところで語頭の 9/10 クラスの名詞接頭辞と分析される鼻音については共時的にどのような形態音韻変化が考えられるだろうか。9/10 クラスの名詞接頭辞の異形態を先行研究 (Ashton 1947: 83-84, Polomé 1967: 68-70) に従いまとめると概ね (4) のようになる。

(4)　ɲ / _ vowel
e.g.) ɲ-ama「肉」, ɲ-umba「家」, ɲ-ota「星」, ɲ-eupe「白い(9/10 クラス)」, ɲ-ingi「多い(9/10 クラス)」

homorganic nasal / _ voiced obstruent
e.g.) m-buzi「ヤギ」, m-βua「雨」, n-deɡʲe「鳥」, n-ziɡʲe「バッタ」, ɲ-dʒia「道」, ŋ-ɡuo「服」

[+aspirated][11] / _ voiceless plosive
e.g.) pʰembe「角」, tʰatu「 3 (9/10 クラス)」, kʰuku「ニワトリ」

Ø / _ elsewhere
e.g.) siku「日」, ɸisi「ハイエナ」, ŋombe「ウシ」

(4) をもとに考えると基底形に ɲ という形態素をたて、その形態素が表層形においては母音の前ではそのままの形で、有声阻害音の前では逆行同化した鼻音で現れ、それ以外の前ではいったん付加されたのち削除される（ただし無声破裂音は有気音化される）と考えることができるだろう。

しかしながら、本稿では上述の共時的な形態音韻変化を認めないような考えを支持したい。その理由を次節で述べる。

2.3　9/10 クラスの名詞接頭辞の付加を共時的形態音韻変化として考える場合の問題点

Rzwuski (1975: 10) は *n-jugu*「落花生」が *m-n-jugu*「落花生の草」に接辞交替せずに派生し

[10] 通言語的に前鼻音化入破音はみられない (Maddieson & Ladefoged 1993: 254)。

[11] 筆者のインフォーマントから得られたデータでは先行研究でいわれているような有気音と無気音の対立（paa「屋根」: pʰaa「ガゼル」, taa「灯り」: tʰaa「エイ」, kamba「ロープ」: kʰamba「エビ」）はなかった。これを踏まえると現代ザンジバル都市部方言では有気音を音素として立てるべきではないだろう。

ていることを理由にスワヒリ語 9/10 クラスの名詞接頭辞は共時的分析では分離できないと述べている。Schadeberg (2009a: 90) も 9/10 クラスの名詞には共時的に分離できる名詞接頭辞がないと述べている。このように考えられるのであれば 9/10 クラスの名詞の語頭の鼻音と有声阻害音の間には共時的には形態素境界がないことになり、形態素境界があるから別の音素を立てるべきであるという主張は成立すらしなくなる。以下に 9/10 クラスの名詞接頭辞の付加を共時的な語形成とはせず、通時的変化の枠組みのなかで捉えるべきであると考えられる理由を二つ挙げる。

2.3.1 例外の存在

第一の理由としては (4) の変化に当てはまらない例の存在がある。(5) にその例を挙げる。なお括弧内には 9/10 クラスの名詞クラス接頭辞を仮に ɲ としたうえで、接辞と語幹を分析した形式を示す。

(5) a. ndeɸu (ɲ-reɸu)「長い(9/10 クラス)」
b. ndoa (ɲ-oa)「結婚」
c. ɲdʒema (ɲ-ema)「良い(9/10 クラス)」
d. mbili (ɲ-wili)「2 (9/10 クラス)」

まず (5a) では語幹の流音が 9/10 クラス接辞が付加されると有声破裂音に変化している。Polomé (1967: 69) は鼻音と流音が連続すると /nd/ となるとしている。仮にこの変化も含めた形態音韻変化の規則をたてたとしても (5b) は説明できない。ndoa「結婚」という名詞は -oa「結婚する」という動詞からの派生であることは容易に推察されるが、-oa の語頭には言わずもがな流音はない。スワヒリ語を含むサバキ語派の祖語の段階では-oa「結婚する」に対して*-lola という形が再建されている (Nurse & Hinnebusch 1993: 101)。つまり ndoa についてはこの流音 l が保持されている時代に派生が起こったと考えるのが妥当であろう。同様のことは ndoto「夢」についても言える。

(5c) の dʒ の由来についてははっきりとはわかっていない。サバキ語派[12]のコモロ語のマオレ方言[13]では/ngema~nǰema[14]/という交替がみられる、サバキ語派の祖語の*g はスワヒリ語のミジケンダ方言[15]の dʒ に対応している、祖語の*g は多くの方言で失われているという事実 (Nurse & Hinnebusch 1993: 104-108) から通時的な変化については何らかの説明ができる可能性があるが、共時的に dʒ の出現を説明するのは非常に困難である。

(5d) の b の出現も不規則な変化である。基底形に ɲ という形態素をたてた場合、スワヒリ語に ɲw という音連続は存在しており (eg. ɲwele「髪」, - kuɲwa「飲む」)、* ɲwili という形

[12] スワヒリ語を含む東アフリカ沿岸部の近い系統関係にあるとされる 6 言語が属する言語グループ (Nurse & Hinnebusch 1993: 4)。
[13] マヨットで話される (Nurse & Hinnebusch 1993: 18)。
[14] ここでの表記法は Nurse & Hinnebusch (1993) に従う。/ǰ/ は歯茎硬口蓋破擦音を表す。
[15] ケニアのマリンディからタンザニアのタンガで話される (Nurse & Hinnebusch 1993: 16-17)。

式が表層形において予想されうるが、このような語形では現れない。ちなみに語幹の-wili の語頭の w はサバキ語派の祖語の両唇接近音*W に、更にこの*W はバントゥ祖語の*b に対応しているとされる (Nurse & Hinnebusch 1993: 89-91)。このことから mbili の b はバントゥ祖語の状態がそのまま保たれていることも可能性としてはある。

以上みてきたように 9/10 クラスの名詞接頭辞付加については (4) 以外の規則を立てなければ共時的変化として説明できない例、あるいはそもそも共時的変化としては説明が困難な例がある。

2.3.2 借用語[16]

Ashton (1947: 83) は 9/10 クラスには借用語も含まれるとしているが、挙げられている語 (*barua*「手紙」, *dawa*「薬」, *jinsi*「様子」, *daraja*「橋」; いずれもアラビア語由来) は名詞接頭辞が付加されていない[17]。ただし、借用語であれば総じて接辞が付加されていないかというとそういうわけではない。(6) に 9/10 クラスの名詞接頭辞が付加されたと考えられる借用語を挙げる。

(6) に挙げた語とは対照的に 19 世紀以降に入ってきたと考えられる英語からの借用語（e.g. *baisikeli*「自転車」, *blanketi*「毛布」, *gazeti*「新聞」）にはこの 9/10 クラスの接頭辞は付加されていない。Nurse & Hinnebusch (1993: 355) はオマーンによる東アフリカ沿岸地域の支配が始まる 17 世紀以前までは 9/10 クラスに分類された借用語（*ndama*「仔牛」, *ngamia*「ラクダ」）に名詞接頭辞が付加されていたと述べている。この指摘通りある時代以降 9/10 クラスの接辞付加が生産性を失っていたとすれば、9/10 クラスの名詞接頭辞が付加されている借用語とそうでない借用語があることは説明できる。こうした事実も 9/10 クラスの接辞付加が共時的に機能している語形成法とはいえない根拠になるだろう。

[16] 借用語かどうかの判断や、どの言語からの借用かについては Johnson (1939) や Schadeberg (2009b) による。

[17] 接頭辞が付加されないことから「外来語を受けいれるクラスとして開かれている (中島 2000: 51)」と言われることもある。

(6)　9/10 クラスの名詞接頭辞が付加されている借用語

語形	意味	借用元の言語	元の語形	借用年代
mbatata	ジャガイモ	ポルトガル語	batata	1500–1700
mbuzi	ヤギ	Hindi-Urdu 語 ペルシア語	buz ~ būz buz	-3000–1
ndimu	ライム	アラビア語 Hindi-Urdu 語 ペルシア語	līm, laimū(n) līmū(n) līmū	800–1940
ngalawa	カヌー	Hindi-Urdu 語 マレー語 （マラガシ語）	gallawat gadawa (ngadawa)	800–1940
ngamia	ラクダ	アラビア語	ǧamal	700–800
ngano	小麦	Hindi-Urdu 語	gandum	800–1940

(Schadeberg 2009b に基づく)

2.4　成節的な鼻音について

9/10 クラスの名詞接頭辞は単音節語幹に前接した場合、ストレスを担う成節的な鼻音になる (Polomé 1967: 68, 69)。9/10 クラスの名詞接頭辞が成節的になるのはストレス担うためとも言われる (Batibo & Rottland 1992: 93)。2.3 節で述べたように 9/10 クラスの名詞の語頭に現れる鼻音をかつて生産的だった接頭辞の痕跡と考えるのであれば、単音節語幹に前接する鼻音が成節的である理由については二通りの可能性が考えられる。ひとつは通時的には他の 9/10 クラスの名詞接頭辞と同じく弱化しており、共時的には基底において多音節語幹に前接する場合と同様に非成節的であるが、強勢付与の要請から表層では成節的になっているという可能性である。もうひとつはかつては後続する語幹の音節数に関わらず成節的であった[18]9/10 クラスの名詞接頭辞が、単音節語幹に前接する場合のみ強勢を置かれたために弱化が進まなかったという可能性である[19]。後者の考え方では共時的な変化は想定されない。成節的鼻音が有声阻害音だけでなく無声阻害音や鼻音の前でも現れることや、延長されているの

[18] Meinhof (1932: 39, 113-115) はバントゥ祖語 (Ur-Bantu) の 9 クラスの名詞接頭辞に**ni-*という形式を再建して、スワヒリ語の 9/10 クラスの語頭鼻音はそこから変化したものとしている。筆者の調査しているザンジバル・ウングゥジャ島南部のマクンドゥチ方言では動詞の完了形は [人称接頭辞-動詞語幹] という構造だが、1 人称の人称接頭辞 *ɲi-*は動詞語幹の最初の子音に調音点同化した鼻音と自由交替する。この際鼻音は成節性を保持している。こうしたことを踏まえると、9/10 クラスの名詞接頭辞が後続する子音に調音点が同化して成節性を保持していた段階を想定してもそれほど不自然ではないだろう。

[19] Marten (2002: 6) によってこの指摘はなされている。

が母音でなく鼻音であることを説明するためには後者の立場を採るのが妥当であろう[20]。以下 (7) に成節的な鼻音が現れる 9/10 クラスの語を挙げる。

(7) m̩ɓu「蚊」 m̩ɓwa「犬」
m̩pja「新しい（9 クラス）」
m̩βi「白髪」 n̩ta「蝋」
n̩ne 「4」 n̩zi「蠅」
n̩ʧa「先端」 n̩ʧi「国」
ɲ̩ʤe「外」 ŋ̩ɡe「サソリ」

成節的鼻音は (3) の音素目録の鼻音 (m, n, ɲ, ŋ) の条件異音と考えられ、成節的になる条件は (8) のようになる。

(8) m, n, ɲ, ŋ → [+syll] / _ [+cons][21]

なお鼻音の直後の有声破裂音の音価は筆者が確認したところ入破音 [ɓ], [ɡ] であったが、有声破擦音 [dʒ] は非入破音であった。本稿ではとりあえずこの[dʒ] を/ʃ/ の条件異音（/ʃ/→ [dʒ] / [+nasal] _）とする。なお前鼻音化阻害音を音素としてたてた場合この条件異音はこの語にのみ現れる。

2.5 共時的な接頭辞付加を認めない分析の問題点

2.3 節で 9/10 クラスの名詞接頭辞付加が共時的には生産性を失っているとしたが、この分析には問題点がある。名詞接頭辞が付加されるものの中には形容詞や 11 クラスの名詞の複数形にあたる 10 クラスの名詞のように接辞の交替によって屈折するものもある。この接辞付加を共時的に認めない場合、レキシコンに名詞、形容詞ともに接頭辞が付加された形で存在することになり、レキシコンに登録されている語の数は増えてしまう。

(9) 9/10 クラスの形容詞の例
mbaja (-ɓaja)「悪い」 mbili (-wili)「2」
ndoɡo (-ɗoɡo)「小さい」 ŋgumu (-ɡumu)「固い」
nzuri (-zuri)「良い」 ndeɸu(-reɸu)「長い」
ɲeupe (-eupe)「白い」 ɲiŋgi (-iŋgi)「多い」

[20] ケニア南部の沿岸部で話されるチフンディ方言では鼻音は成節的ではなく母音が延長されている (Batibo 1985: 76-77)。またマクンドゥチ方言には多くの方言のもつ語の後ろから 2 番目の音節に強勢が置かれるという規則がないようであるが、(7) に対応する語の有声破裂音の前の鼻音部分は非成節的であり母音の延長もみられない。

[21] 1, 3 クラスの名詞接頭辞、動詞に前節する人称接辞、いくつかの動詞語幹（e.g. *-amka*「起きる」, *-zungumza*「会話する」, *-pumzika*「休む」, *-chemka*「沸く」）の中に m̩という成節的鼻音があるが、この規則を想定しても大きな問題はない。ただし/h/の前でも m̩は現れる。また借用語の中にはこの規則に当てはまらないものもある（e.g. *benki*「銀行」*dansi*「ダンス」: いずれも英語からの借用語）が本稿では論考の対象としない。

(10)　10/11 クラスの名詞の例
sg. u-limi : pl. n-dimi「舌」
sg. u-ɓawa : pl. m-bawa「翼」

また 9/10 クラスの接頭辞の中には他の名詞接頭辞と交替する（かのようにみえる）ものもある。(11) では交替した接頭辞がそれぞれ指小辞、指大辞として機能している。(12) は接頭辞 ma-と交替する例である。通常単数形の 9 クラス名詞と複数形の 10 クラスの名詞は接頭辞が変わることなく同形であるが、接頭辞 ma-との交替によっても複数を表しうる。

(11)　ɲ-umba「建物、家」: ʧ-umba「小さい建物、部屋」: ʃ-umba「大きい建物、邸宅」
n-deɡʑe「鳥」: ki-ɗeɡʑe「小鳥」

(12)　n-dizi : ma-ɗizi「バナナ」
ɲ-ʤia : ma-ʃia「道」
ŋ-ɡuo : ma-ɡʃuo「服」
cf. ŋombe : ʔma-ɡʃombe「ウシ」

(9) (10) (11) (12) から 9/10 クラスの名詞に対する接辞付加は共時的にも機能しているようにみえる。2.3 節での議論に対して「名詞接頭辞付加はレキシコンの特定のグループ（例えば 18 世紀以後に借用された語以外）に適用される」「接頭辞付加は概ね生産的で不規則な変化をするものだけが接頭辞付加された形式でレキシコンに登録されている」という主張も成り立ちうる。

ところで (12) の複数を表す ma-との交替は一応容認されたが、それに加えてあまり一般的に使う表現ではないというコメントもインフォーマントから得られた。ちなみに ŋombe「ウシ」の語頭の鼻音は通時的にみると 9/10 クラスの名詞接頭辞に由来すると言われるが[22] (Nurse & Hinnebusch 1993: 148)、この例での ma-との交替はとりわけ容認度が低かった。こうしたインフォーマントの直観を踏まえると、(12) の例の語頭の鼻音部分は共時的には分析的ではなく、(9) (10) (11) など接辞の交替によって形成される（ように少なくともみえる）語の類推から (12) の接辞の交替が起きていることが推測される。

また (10) の 11/10 クラスの名詞については辞書[23]の記述では 11 クラスと 10 クラスの間で単複の対を成しているとされながら、インフォーマントから得られたデータではそうならない例が散見される。

[22] 祖語の段階では*ŋgombe という再建形がたてられ、その変化については鼻音+有声破裂音に鼻音+子音（あるいは鼻音）が後続する場合に鼻音+有声破裂音が鼻音重複もしくは鼻音として実現するというマインホフの法則で説明される

[23] TUKI (2001) を参照した。

(13)　11 クラスと 10 クラスで単複の対を成していない例（括弧内は辞書の記述）

sg. u-ɓaβu : pl. mi-ɓaβu (m-baβu[24])「脇」

sg. u-ɓao : pl. mi-ɓao (m-bao)「板」

sg. u-ɓale : pl.βi-ɓale (m-bale)「切れ端」

sg. u-wanda : pl. βi-wanda (ɲ-anda)「開けた場所、平原」

sg. u-waɲdʒa : pl. βi-waɲdʒa (ɲ-aɲdʒa)「広場、グラウンド」

sg. w-imbo/ɲ-imbo (w-imbo) : pl. ɲ-imbo「歌」

sg. u-ɸaɡio : pl. mi-ɸaɡio (ɸaɡio)「箒」

sg. u-ɸunguo : pl. ɸunguo/mi-ɸunguo「鍵」

sg. kutʃa (u-kutʃa) : pl. kutʃa「爪」

(13) のような例を踏まえると 11 クラスと 10 クラスの間の接辞の交替も生産性を失いつつあるようにみえる。指小辞・指大辞との交替も限定的であることは既に指摘されており (Ashton 1947: 295)、名詞接頭辞が付加される形容詞もその数は限られている[25] (Polomé 1967: 103)。

名詞接頭辞の付加が共時的に行われているのかどうかという問題の解決のためにはまず語幹が共通しており接頭辞の交替によって名詞クラス（と意味）が変わる語がどれだけあるのかを調べるべきである。仮に語幹が共通しており接頭辞の交替によって名詞クラス（と意味）が変わる語が膨大にあれば接頭辞付加が共時的に行われていることを検討する必要があるだろう。しかしながら上述のことを鑑みると 9/10 クラスの名詞接頭辞付加は仮に共時的に行われているとしても、一般的に考えられているよりも少ない可能性が高い。

3　語中の前鼻音化阻害音について

本節では語中の前鼻音化阻害音について簡単に述べる。Polomé (1967: 58) は語中の前鼻音化阻害音の直前に半長母音が現れるとしている。この観察の通りであれば母音の長さと前鼻音化阻害音の関連について Maddieson & Ladefoged (1993: 275-277) がスクマ語に対して行った[26]分析を用いて説明できるかもしれないが、筆者が聞いた限りでは前鼻音化阻害音に先行する母音とそれ以外の子音に先行する母音の間に差はみられなかった。母音の長さに対する正確な評価は音響分析でなされるべきであるが、あえて説明すべき事象が存在するとは考えにくい。(14) に筆者が母音長の聞き取りを行った語を挙げておく。一番左側に前鼻音化阻害音が含まれる語を、右側にそれと（疑似）最小対を成す語を挙げる。なおすべての語について語単独ではなく、その語を含む文または句を発音してもらっている。詳細については付録

[24] なお mbaβu, mbao は語彙として存在しないわけではなく、それぞれ「肋骨」「材木」という意味になり、意味の分化が起こっているようである。

[25] Ashton (1947: 48-49) は 49 語を挙げ概ね網羅的としている。また Polomé (1967: 104) は 39 語を挙げている。

[26] 基底では鼻音がモーラと結びついており、派生の結果表層ではそのモーラが先行する母音と鼻音に割り当てられるという分析を行っている。

を参照されたい。

(14) ʧenza「みかん」: -ʧeza「遊ぶ」
-ɸumbua「開ける」: -ɸumua「ほどく」
kamba「ロープ」: -kaɓa「絞める」: -kama「しぼる」
kiumbe「被創造物」: kiume「男性」
kombe「二枚貝」: koɓe「陸ガメ」
-kuɲdʒa「たたむ」: -kuʃa「来る」: -kuna「おろす」
-ponda「けなす」: -pona「治る」
ʃamba「畑」: ʃaɓa「銅」
-ʃinda「勝つ」: ʃiɗa「困難」
-soŋgea「押す」: -soɡʃea「詰める」
-imba「歌う」: -iɓa「盗む」
-ɓembea「揺らす」: -ɓeɓea「背負う」
ɲumba「家」: ɲuma「後ろ」
-ɓandikika「貼ってある」: -ɓanikika「閉じてある」
-ɓandua「剥がす」: -ɓanua「開ける」
-ʧaɲdʒa「割る」: -ʧana「裂く」

4 おわりに

これまでスワヒリ語の記述において前鼻音化阻害音を音素としてたてるのは一般的ではなかった。本稿では 1 節で [mɓ] と[mb] に対立があることと、音節構造を考慮した場合の記述の簡潔性を理由に前鼻音化阻害音を音素としてたてるべきであるという主張を行った。2 節ではこれまで音素としてたてる障害のひとつとなっていた 9/10 クラスの名詞接頭辞について論じた。3 節では語中の前鼻音化阻害音について先行研究での観察が不正確である可能性が高いことを述べた。

2.5 節で 9/10 クラスの名詞接頭辞付加が共時的に行われているかについて疑問を呈し、それを調べる必要性を述べたが、接頭辞付加が共時的な語形成法（あるいは語形変化）であるかどうかは 9/10 クラスに限らす他のクラスの名詞接頭辞も対象となる問題だろう。

付録

ここでは3節に挙げた語中に前鼻音化阻害音を含む語の前鼻音化阻害音の直前の母音の長さを調べるためにインフォーマントに発音してもらった文と句を挙げる。比較対象となる語は太字で示す。なお名詞と動詞を比較する場合は *ni-na*（一人称単数の所有表現「私は～を持っている」）*ni-na-*（一人称単数進行（現在）「私は～をしている」）をそれぞれ前接させて作例している。どちらの *nina* も強勢を置かれることなどなく音調上の違いはないと言える。文と句の表記はスワヒリ語の正書法の慣例に従う。

ʧenza「みかん」: -ʧeza「遊ぶ」
ni-na ***chenza*** *kweli* (1SG-POSS mandarin orange really)「私は本当にみかんをもっている」
*ni-na-**cheza** kweli* (1SG-PROG-play really)「私は本当に遊んでいる」

-ɸumbua「開ける」: -ɸumua「ほどく」
*ni-na-**fumbua** tu* (1SG-PROG-open just)「私はあけているだけ」
*ni-na-**fumua** tu* (1SG-PROG-undo just)「私はほどいているだけ」

kamba「ロープ」: -kaɓa「絞める」: -kama「しぼる」
ni-na ***kamba*** *kidogo* (1SG-POSS rope a little)「私はロープを少しもっている」
*ni-na-**kaba** kidogo* (1SG-PROG-choke)「私は少し絞めている」
*ni-na-**kama** kidogo* (1SG-PROG-squeeze)「私は少ししぼっている」

kiumbe「被創造物」: kiume「男性」
kiumbe *kidogo* (creature small)「小さな存在」
kiume *kidogo* (male small)「小さな男性」

kombe「二枚貝」: koɓe「陸ガメ」
kombe *kubwa* (shell big)「大きな二枚貝」
kobe *kubwa* (tortoise big)「大きな陸ガメ」

-kuɲdʒa「たたむ」: -kuʃa「来る」: -kuna「おろす」
*na-**kunja** tena* (PROG[27]-fold again)「（私は）再びたたむ」
*na-**kuja** tena* (PROG-come again)「（私は）再び来る」
*na-**kuna** tena* (PROG-scratch again)「（私は）再びおろす」

-ponda「すりつぶす」: -pona「治る」
*ni-na-**ponda** kiharaka* (1SG-PROG-pound hastily)「私は急いですりつぶしている」
*ni-na-**pona** kiharaka* (1SG-PROG-recover hastily)「私は急いで治る」

---

[27] *na-*という形態素は *n-a-* (1SG-PRS) と分析されるとも言われるが本稿では *na-*を単一の形態素とみなし、1人称単数の標識は省略されているものと考える。

ʃamba「畑」: ʃaɓa「銅」
hili ni ***shamba*** *pana* (this COP field large)「これは広い畑だ」
hii ni ***shaba*** *pana* (this COP metal flat)「これは平たい金属だ」

-ʃinda「勝つ」: ʃidȁ「困難」
*ni-na-**shinda** kweli* (1SG-PROG-win really)「私は本当に勝つ」
*ni-na **shida** kweli* (1SG-POSS really)「私は本当に困難を抱えている」

-soŋgea「押す」: -soɡ̊ea「つめる」
*ni-na-**songea** kwa nguvu* (1SG-PROG-push by power)「私は精一杯押している」
*ni-na-**sogea** kwa nguvu* (1SG-PROG-move by power)「私は精一杯つめている」

-imba「歌う」: -iɓa「盗む」
*u-na-**imba** sana* (2SG-PROG-sing very much)「あなたはすごく歌っている」
*u-na-**iba** sana* (2SG-PROG-steal very much)「あなたはすごく盗む」

-ɓembea「揺らす」: -ɓeɓea「背負う」
*ni-na-m-**bembea** kaka yangu* (1SG-PROG-3SG-swing brother my)「私は兄をゆらしている」
*ni-na-m-**bebea** kaka yangu* (1SG-PROG-3SG-carry brother my)「私は兄をおぶっている」

ɲumba「家」: ɲuma「後ろ」
nyumba *yangu* (house my)「私の家」
nyuma *yangu* (back my)「私の後ろ」

-ɓandikika「貼ってある」: -ɓanikika「閉じてある」
*i-me-**bandikika** karatasi* (G9-PRF-be sticked paper)「紙が貼ってある」
*i-me-**banikika** karatasi*(G9-PRF-be closed paper)「紙が閉じてある」

-ɓandua「はがす」: -ɓanua「開く」
*ni-me-**bandua** karatasi* (1SG-PRF-tear paper)「私は紙をはがした」
*ni-me-**banua** karatasi* (1SG-PRF-open paper)「私は紙を開いた」

-ʧaɲdʒa「割る」: -ʧana「裂く」
*a-na-**chanja** kidogo* (3SG-PROG-break a little)「彼は少し割った」
*a-na-**chana** kidogo* (3SG-PROG-split a little)「彼は少し裂いた」

参考文献

Ashton, E. O. (1947). *Swahili Grammar (2nd. ed.)*. London: Longman.

Bakari, M. (1985). *The Morphophonology of the Kenyan Swahili Dialects*. Berlin: Dietrich Reimer.

Batibo, H. M., & Rottland, F. (1992). The minimality condition in Swahili word forms. *Afrikanistische Arbeitspapier*, 89-110.

Contini-Morava, E. (1997). Swahili Phonology. In A. S. Kaye, *Phonologies of Asia and Africa* (pp. 841-860). Winona Lake, Ind: Eisenbrauns.

Johnson, F. (1939). *A Standard Swahili-English Dictionary*. Nairobi: Oxford University Press.

Maddieson, I., & Ladefoged, P. (1993). Phonetics of Partially Nasal Consonants. In M. K. Huggman, & R. A. Krakow, *Phonetics and Phonology* vol. 5*: Nasals, Nasalization, and the Velum* (pp. 251-301). San Diego: Academic Press.

Marten, L. (2002). A lexical treatment for stem markers in Swahili. *Afrikanistische Arbeitspapiere: Swahili Forum IX*, 82-100.

Meinhof, C. (1932). *Introduction to the Phonology of the Bantu Languages traslated by N. J. van Waremelo*. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.

Mohamed, M. A. (2001). *Modern Swahili Grammar*. Nairobi: East African Publishers.

Myachina, E. N. (1981). *The Swahili Language translated by G.L. Campbell*. London: Routledge & Kegan Paul.

Nurse, D., & Hinnebusch, T. J. (1993). *Swahili and Sabaki: A Linguistic History*. Berkeley: University of California Press.

Polomé, E. C. (1967). *Swahili Language Handbook*. Washington, DC: Center for Applied Linguistics.

Rzewuski, E. (1975). Phonetic Structure of Swahili Nominal Roots. *Kiswahili*, Vol. 45/1, 10-15.

Schadeberg, T. C. (2009a). Loanwords in Swahili. In M. Haspelmath, & U. Tadmor, *Loanwords in the World's Languages: A Comparative Handbook* (pp. 76-102). Berlin: Walter de Gruyter.

———— (2009b). Swahili vocabulary. In M. Haspelmath, & U. Tadmor, *World Loanword Database*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology.
(URL: http://wold.livingsources.org/vocabulary/1, Accessed on 2014-02-11.)

Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili. (TUKI). (2001). *Kamusi ya Kiswahili-Kiingereza*. Dar es Salaam: Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili (TUKI).

Welmers, W. E. (1973). *African Language Structures*. Berkeley: University of California Press.

中島久 (2000)『スワヒリ語文法』東京: 大学書林.

謝辞

本稿執筆に際して有益なコメントをくださった仲尾周一郎氏、京都大学言語学研究室の先生方や学生の皆様、また調査に協力してくれたザンジバルストーンタウンの友人に感謝いたします。